

4月4日「主の復活ハレルヤ！」マタイ福音書28：1～10

私たちには恐れているものがあります。「未知」であることです。行ったことが無い場所、やったことが無いこと、見たことが無いもの、会ったことが無い人、そういった未知なものと遭遇することを私たちは大変恐れます。私たち人間が経験を基にして予測を立てて生きる生き物だからです。大人になればなるほど、その予測は優れたものとなりますが、その分、未知との遭遇はより恐ろしいものになっていくのでしょうか。

私たちは今日、コロナ禍の中で2度目のイースターを迎えました。国内の累積の死者数は47万人を超え、失業者も8万人を超えたとのこと。色んな不安がありますが、最も恐ろしいことはいつ収束するのか、先が見えないことではないでしょうか。「あと～日後には、特効薬が出来て必ず収束します！」そうなってくればどれほど楽だろうかと思えます。一つの恐れが広がると、他の恐れもどんどん広がります。この状況の中で互いに助け合うどころか、海外ではアジア人や黒人への差別やヘイト、国内では医療従事者やコロナ感染者へ、少しでも「未知な」者への恐れが蔓延していつていることに、私たちの罪が浮き彫りにされているように感じます。そんな私たちにとって最も大きな恐れの対象は「死」ではないでしょうか。どんな人にでも必ず死は訪れます。けれども、その日がいつなのか、死んだあとどうなるのか、誰にも分かりません。死を経験することは出来ないからです。だから私たちは死を恐れ、なるべく遠ざけようとしています。

イエスの弟子たちも、そんな「恐れ」に取り付かれていました。あんなに信頼して、慕っていたイエス様が何の罪もないのに処刑されてしまったからです。弟子たちにはその処刑を止めることも、またイエスに従って共に十字架にかかることも、何も出来ませんでした。仕事も家もすべて捨ててイエスに従っていたのに、この先どうやって生きて行けば良いのか見当もつきません。次は自分たちも命が狙われるかもしれません。弟子たちは無力感と絶望と不安、「恐れ」でいっぱいだったのです。

そんな時に、少しでも動けたのは男性ではなく、女性たちでした。彼女たちはとにかく一刻も早く傷つけられたイエス様の遺体をきちんと埋葬

してあげたかったのです。イエス様が処刑され、息を引き取られたのは金曜日の午後3時ごろ。アリマタヤのヨセフとマリアたちが遺体を引き取ったのはその日の夕方でした。ユダヤ教では太陰暦を用いていたので、日没から1日が始まります。数時間後にはあらゆる労働が禁じられている安息日が迫っていましたので、とりあえず布にくるんで墓に納めるしか出来ませんでした。早くしないと大切なイエス様の遺体が腐敗してしまいます。安息日が明けた日曜日の明け方早く、マグダラのマリアともう一人のマリア、二人の女性は、急いでイエスの墓へと向かいました。ところが、墓の前に着くと驚くことが起きました。突然地震が起こり、天使たちが現れて、墓の蓋をしていた石を転がして、その上に座りました。墓を見張っていた番兵たちは恐ろしさのあまり死人のように固まってしまいました。天使たちは二人のマリアに語りかけたのです。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。」死者の復活！？一体何を言っているのか訳が分かりません。けれども、確かに墓の中に納めたはずのイエス様の遺体はありませんでした。天使たちは続けました。「急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』」そこで、彼女たちは思い出したのです。イエスがかねてから「死んで三日目に復活する」と告げておられたことを。女性たちは恐れつつも、勇気を振り絞って走り出しました。そんな彼女たちの前に、イエス様は現れて語りかけてくださいました。「おはよう！」「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」イエス様はこうして復活されたのです。

イエスは言われます。「恐れるな！」私たちに未知のモノと出会う恐れを捨て去るようにと。恐れはイエスが語られた愛と対局にあるからです。恐れているとは他者と出会うことが出来ません、恐れているとは他者を受け入れることが出来ません。そして、恐れているとは他者を愛することが出来ないからです。イエスは復活することによって私たちに恐れる者から愛する者

へと変えてくださった。そしてご自身で「死」という最大の恐れにも打ち勝って見せてくださったのです。

ところで、復活の話を聴くと私たちはどうしても「どうやって死から復活したのか」と方法が気になるのではないのでしょうか？以前、神戸の教会に勤めていた時に、韓国から神戸大学の大学院に留学して「光学」を研究している非常に優秀な理系の学生がいました。彼にこんなことを聞いたことがあります。「君みたいな科学を研究している人が、どうして、死者の復活なんていう非科学的なことを信じられるの？」彼は少し考えてからこう答えました。「科学的な証明というのは万能ではなくて、色んな条件が揃わないと定義づけ出来ない。だから、今、この場で証明できないことが、これから先も証明できないとは限らない。」つまり、科学にも限界があって、私たちに人間の理解を超えた出来事を彼は認めるといいます。聖書もイエスがどうやって復活したのかという「方法」にはあまり関心はないように思えます。けれども一つだけはっきりしていることがあります。新共同訳聖書では「復活なされた」とあるので、分かり辛いですが、天使の言葉はギリシャ語の本来の文法から訳するとこうなります。「**彼は自分で言った通り、起こされたからである。**」（佐藤研訳）イエスは自分の力で復活したのではありません。復活させられたのです。・・・誰に？もちろん神さまに！神さまは私たち人間の思いも力もはるかに超えて、思いがけないことをなさるのです！

では、イエスは一体いつ復活させられたのか？三日目に復活したと私たちは思い込んでいますが、三日目は弟子たちがイエスの墓が空であることを認識しただけで、もしかしたら、2日目には、いや、墓に納められてすぐにでもイエスは神さまによって復活させられていたかもしれません。復活は弟子たちが絶望に打ちひしがれている間に、ひっそりで行われていたのです。そう、復活とは真つ暗闇の中で行われていたのです。朝の光が差し込む前のまだ真つ暗な時間帯に。

私が大好きな讃美歌に575「球根の中には」があります。春の訪れを告げるイースターにぴったりの讃美歌です。「球根の中には花が秘められ、

さなぎの中からいのちはばたく。寒い冬の中 春は目覚める」固い固い球根の中に美しい花が入っていて、死んだように動かなくなったさなぎの中から生き生きと羽ばたく蝶々が現れます。そして、まだ寒い冬の雪の下には春の訪れとともに芽吹くたくさんの植物たちが準備をしています。同じように希望の光というのは実は暗闇のなかでこそ、すでに動き始めているのです。私たち人間はなかなかそのことに気付くことは出来ませんが、確かに闇の中でこそ光は輝き始めるのです。ヨハネの言葉です。「**言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。**」

私たちはコロナ禍の中で2度目のイースターを迎えました。今も、先が見えない、不安、恐れを抱いています。簡単には「おめでとう！」とは言いつらい、互いに疑心暗鬼になり、差別し合ったり、排除し合ったり、攻撃的になったりする現実があります。けれども、だからこそ、私たちはそんな時でも必ず復活があることを覚えたい。希望の光は闇のなかでこそ、輝きだします。イエスが暗闇の中で「起こされた」ように、神はすでにこの暗闇の中で働き始めておられるのです。復活のイエスは言われます。「**恐れるな!**」私たちが他者を恐れる者から人を愛する者へと変えてくださいます。「**恐れるな!**」そして、最大の恐れである死にさえ打ち勝たれたのです。今日の日を心から喜び合いたい！イースターおめでとうございます！